中学校英語教科書収録の文学教材の読み方

How to Read Literary Materials Adopted in English Textbooks for Junior High Schools

奥 村 直 史
Naofumi OKUMURA

山梨大学教育学部紀要　第 30 号　2019 年度抜刷

中学校英語教科書収録の文学教材の読み方

How to Read Literary Materials Adopted in English Textbooks for Junior High Schools

奥 村 直 史
Naofumi OKUMURA

１．はじめに

文部科学省による『学習指導要領』においてコミュニケーション能力重視の方向が進むにつれ、中学校および高等学校英語検定教科書から文学教材の数が減少してきていることが報告されている（田口，2017，小澤・幡山，2010）。しかし、英語教育における文学教材の有用性を説く研究者は多く（中村，2004，斎藤・海木・室井・中村，2004）、さらに現場で英語を教える中学、高校教員の８割以上が文学教材に肯定的意見を持っているとのアンケート結果がある（小澤・幡山，2010）。このように英語教育において文学教材の活用が望まれてはいるものの、実際に英語を教える教員側が「文学教材をどう教えていいのかわからない」との現状がある（斉藤・室井・中村・梅木，2004，p. 9）。文学教材の扱い方としては『文学教材実践ハンドブック』（吉村・安田，2013）があるが、大学生を対象とした原作を扱ったものである。中学、高校の教科書に収録される文学教材は、学習過程に応じて語彙や文法が調整され、要約により原作よりも短くなっている。そこで原作との違いが問題になるが、「文学教材を扱う際に、原作の良さをいかに改作が損なっているかという点によく話が集まるが、中学校や高校では必然的なことであり、そこで話が終わったら、全く建設的でない」（田口，2017，p. 8）との指摘があり、まさにそのとおりである。そこで本稿では、中学校の教科書に掲載された改作版を文学テクストそのもの、つまり原作とみなして読むことを試みたい。学習者に与えられるのは改作版のみであるから、それをひとつの有機体として読むことが実践的と思われるが、先行研究にそのような例は見られなかった。ここで扱うのは三省堂の中学３年生用教科書『New Crown English Series 3』（2012年版）収録の“Jimmy Valentine”で原作はO. Henryの “A Retrieved Reformation”である。[1]語彙・文法の難易度と作品解釈の難易度は異なるので、中学３年生だけを対象とするわけではなく、幅広く高校生や大学生をも対象とした読み方を提示する。

２．読み方（１）

以下にテクスト全文を引用し、あらすじに近い標準的と思われる「改心して良い人間に生まれ変わる物語」と解釈する場合の着目点を□で囲んだ。まずは□で囲んだ個所からどのようなことが言えるのか推測してみてほしい。

Jimmy Valentine was in prison for breaking into safes. After four months, he was released. Soon after that, several safes were broken into in the area. Ben Price, a policeman, was on the job. “It looks like the work of Jimmy. I must catch him.”

Jimmy could tell the police were after him. So he decided to move to Elmore, a small town, and hide. One day, he saw a woman walking down the street. Their eyes met. In that moment, he decided to start a new life. His life as a safebreaker was behind him.

Jimmy opened a shoe store and worked hard for many months. He made many new friends in Elmore. People in the town respected him. He became friends with the woman, Susan Adams. She was the daughter of the town’s banker. He asked her to marry him. Their life together was going to start.

Mr Adams bought a new safe for the bank. He was very proud of it. One morning, he took his family and Jimmy to the bank and showed it to them. Two of the family's little girls were playing around the safe.

Just then, Ben Price entered the bank. He saw Jimmy. "I've got him at last," he thought. He started toward Jimmy.

Suddenly there was a cry from Susan. One girl was shut in the safe. The door was locked. It could not be opened.

Through the thick door, they could hear the faint voice of the child. There was nothing they could do.

"Even I can't open the door," Mr Adams said. "And the safe company is many hours away."

Susan turned to Jimmy. "What can we do?"

He looked at her and smiled sadly. "Susan," he said, "Give me your rose. I'll do what I can. Only for you, dear. Only for you."

Susan gave Jimmy the rose. He put it in a pocket of his vest. He turned to the safe. His old skills came back to him. In ten minutes the door was open, and the little girl was back in her family's arms.

Jimmy walked toward the front door. He heard Susan's voice, but he didn't look back. His life in Elmore was finished.

At the door Ben Price stood in Jimmy's way.

"Well," said Jimmy. "You found me at last. Let's go."

Ben looked Jimmy over slowly. "I think you made a mistake, sir. I don't think I know you."

Ben Price left the bank and walked slowly down the street.

（1）言葉の多義性 "safe"

Jimmyは「金庫破り」(breaking into safes) で収監されていたのだが、出所後も「いくつもの金庫が破られた」(several safes were broken into) ことが読み手に知らされる。"safe" の表面上の意味は金庫だが、「安全な」という形容詞の意味もあり、Jimmyの犯す金庫破りが能動態と受動態で繰り返されることにより、地域の人々の安全な生活を脅かす人物であるというイメージが強められる。また、ある女性との出会い後は "safebreaker" と名詞に形を変え「金庫破り」「安全を壊す人」としての人生は終わったとの一連の流れになる。

（2）設定 "a shoe store"

人々が生活するうえで必要不可欠なお金を盗むという危険なJimmyであったが、一人の女性との出会いが彼を変え、「新たな人生を始める」(to start a new life) 決心をする。ここでJimmyの職業として設定されているのが「靴屋」だ。靴は歩くためのものであり、"the path of life" や "the journey of life" などの表現にあるように、人生は道や旅に喩えられることが多く、新たな人生を始めるのにふさわしい設定である。さらに、この出会ったSusanと新たな人生を歩むことをJimmyは望み結婚を申し込む。そして「ふたり一緒の人生が始まろうとしていた」(Their life together was going to start.) ことが語られる。ここでも靴屋の設定が効果を発揮する。靴は "a pair of shoes" という数え方にもあるとおり、ふたつで一組の機能を果たす。ふたりで一組の夫婦と同様であり、互いに支えあって人生を歩んでいくのにふさわしい設定となる。靴屋である必然性を考えるうえでは、靴屋以外の設定に置き換え、魚屋や肉屋ではだめなのかと発問するのもよいだろう。

（3）象徴 "rose"[2]

Susanの家族のひとりである少女が金庫に閉じ込められ生死の危機にあるときに、Jimmyが助ける決

心をする場面で用いられるのが「バラ」である。JimmyはSusanに“Give me your rose.”と言うのだが、ここでは単なる物としてのバラ以上の意味があり、バラは象徴として機能する。『ジーニアス英和辞典』のバラの項目では「文学では『乙女・愛・秘密』の象徴とされる」と説明される。まずバラが「愛」の象徴、すなわちバラが愛をも意味するとした場合をJimmyの行為に当てはめて考えてみる。Susanから受け取ったバラをJimmyは「ベストのポケット」（a pocket of his vest）に挿す。通常ベストのポケットは左胸のところにあるから、JimmyはSusanから受け取った「愛」を自分のハートに重ねたことになる。愛する人から、自らも愛されていることの証を胸に抱き金庫を開ける決心をするのだ。

次にバラが「秘密」の象徴となる場合はどうだろうか。Jimmyにとっての秘密は、自分は金庫破りの犯罪者であるという過去であり、この秘密が明るみに出ればSusanとともに歩む人生は絶たれることになる。しかしJimmyは金庫を開け少女を救う。胸ポケットのバラは「秘密」を明かす決意にもなるのだ。このように象徴の技法は意味の重層化、多様性をもたらす。最後に残った「乙女」の象徴についてだが、原作ではSusanの名は用いられずにAnnabelとなっている。Annabelから想起されるのはEdgar Allan Poeの有名な詩“Annabel Lee”であり、この詩の中で語り手は愛するうら若き「乙女」（maiden）であるAnnabelを失う。“Jimmy Valentine”に即して考えれば、胸ポケットのバラは乙女であるSusanを失う覚悟を表すことになり、同時にPoeが“Annabel Lee”で描いた愛するうら若き乙女の喪失をも響かせる。文学作品には「間テクスト性」と呼ばれる先行テクストの利用もあることを確認しておきたい。文学関連の用語は難解な響きがあるが、難しく考えることはなく象徴については「バラ」以外の花ではどのようにイメージが変わるか、いくつか例を挙げて発問してみるのもよいだろう。

（４）名前“Valentine”“Price”“Adams”

Jimmy Valentine、Ben Price、Susan Adams、Mr Adamsが登場人物となるが、ファーストネームにはごくありふれた名前が用いられているのに対し、ファミリーネームにはバレンタインデーを想起させたり、「値段」を意味したり、アダムとイブのセットとして聞いたことのある名であったりと、名前が目立っていることに気づく。場面ごとにこのファミリーネームがどのように機能しているのか見ていきたい。まずバラの場面に見られるのは、Jimmyによる自己犠牲の精神とキリスト教においてアガペーと呼ばれる無償の愛である。Susanと結婚してともに人生を歩もうとしていた自分の幸福よりも、金庫破りという犯罪者としての過去を晒してもSusanの家族である少女を救うことを選択し、“Only for you, dear. Only for you.”の発言に見られるように、自分よりもSusanの幸福を優先する見返りを求めない無償の愛を体現するJimmyの姿がここにある。Valentineから想起されるのはSt. Valentineであり、この人物にはバレンタインデーの起源ともなったとされる有名な逸話がある。『ウィキペディア』によると、ローマ帝国皇帝クラウディウス２世は兵士の士気が下がることを恐れ結婚を禁じていたのだが、キリスト教の司祭であったウァレンティヌス（ヴァレンタイン）は兵士を憐れみ恋人たちの結婚を司り処刑されたというものだ。あくまで逸話なので真偽のほどは不明だが、文学作品は読者が共有する知識やイメージを利用する。JimmyにValentineのファミリーネームを冠することで、自己犠牲と無償の愛により殉教したとされるSt. Valentineの属性をJimmyに被せているのだ。

一方、警官のBen Priceはどうだろうか。Jimmyは金庫破りの技を使い短時間で金庫を開けたことで犯罪者としての過去があらわになった。エルモアでの生活は終わりとなり、入り口の扉に向かうJimmyの行く手にはBen Priceが立ちはだかる。Jimmyは「ついに見つけましたね。さあ行きましょう。」（“You found me at last. Let’s go.”）と言い、逮捕されることを受け入れる。しかし「BenはJimmyをゆっくりと検分し」（Ben looked Jimmy over slowly.）、「何かお間違いになっているのではないでしょうか。あなた様のことは存じ上げておりません」（I think you made a mistake, sir. I don’t think I know you.）と丁寧な言葉遣いで応じ、銀行から立ち去る。“price”の原義のひとつは「価値」であるが、Ben Priceは、自己犠牲

の精神と無償の愛を持つ人間に生まれ変わったJimmyの「価値」(price)を判断できる人物としてPriceのファミリーネームが与えられているのだ。“look over”には“examine”の意味があり、Jimmyの人としての価値を判断したことがうかがえるのと同時に、“sir”を付けて話す丁寧な表現にもJimmyに対する敬意が認められる。“price”の原義のもうひとつは「代償」である。犯罪者を見逃したことは警官としての職務に背いたことになり「代償」を払わなくてはならない。ここで提示されているのは、「キリスト教における善」対「社会における正義」の構図であるが、Ben Priceの行為はキリスト教における善に軍配を上げている。

最後にAdamsという名についてだが、この物語で唯一ファミリーとして登場するのがAdams家の人々である。Adamsから想起されるのは人類の祖であるAdamであり、善悪の知識の実を食べるという人類最初の罪を犯すという旧約聖書の話が知られている。Adamを複数形にしてファミリーとして提示することで、人は皆生まれながらに罪びとであるとする原罪を暗示し、この物語全体にわたってキリスト教的善悪のテーマを示唆する役割を担っている。このように英語圏の文学作品にはキリスト教文化の背景を知ることで理解が深まることがあるので、異文化理解の観点からも検討してみる必要がある。

３．読み方（２）

ここでは、あらすじや登場人物の気持ち、善悪の判断などを離れ「解放と流動を目指す物語」との解釈を試みる。読み方（１）と同様、着目すべき個所は□で囲った。テクストの特徴を観察してみてほしい。

Jimmy Valentine was in prison for breaking into safes. After four months, he was released. Soon after that, several safes were broken into in the area. Ben Price, a policeman, was on the job. “It looks like the work of Jimmy. I must catch him.”

Jimmy could tell the police were after him. So he decided to move to Elmore, a small town, and hide. One day, he saw a woman walking down the street. Their eyes met. In that moment, he decided to start a new life. His life as a safebreaker was behind him.

Jimmy opened a shoe store and worked hard for many months. He made many new friends in Elmore. People in the town respected him. He became friends with the woman, Susan Adams. She was the daughter of the town’s banker. He asked her to marry him. Their life together was going to start.

Mr Adams bought a new safe for the bank. He was very proud of it. One morning, he took his family and Jimmy to the bank and showed it to them. Two of the family’s little girls were playing around the safe.

Just then, Ben Price entered the bank. He saw Jimmy. “I’ve got him at last,” he thought. He started toward Jimmy.

Suddenly there was a cry from Susan. One girl was shut in the safe. The door was locked. It could not be opened.

Through the thick door, they could hear the faint voice of the child. There was nothing they could do.

“Even I can’t open the door,” Mr Adams said. “And the safe company is many hours away.”

Susan turned to Jimmy. “What can we do?”

He looked at her and smiled sadly. “Susan,” he said, “Give me your rose. I’ll do what I can. Only for you, dear. Only for you.”

Susan gave Jimmy the rose. He put it in a pocket of his vest. He turned to the safe. His old skills came back to him. In ten minutes the door was open, and the little girl was back in her family’s arms.

Jimmy walked toward the front door. He heard Susan’s voice, but he didn’t look back. His life in Elmore

was finished.

At the door Ben Price stood in Jimmy's way.
"Well," said Jimmy. "You found me at last. Let's go."
Ben looked Jimmy over slowly. "I think you made a mistake, sir. I don't think I know you."
Ben Price left the bank and walked slowly down the street.

まず、このテクストを観察した結果見えてきたものを以下に列挙する。

（1）反復される語[3]

金庫　"safes"　"a new safe"　"the safe"
銀行（家）"the bank" "banker"
扉　"The door"　"the thick door"　"the front door"
破る　"breaking into"　"were broken into"
開く　"open"

（2）反復される行為

閉じ込められる状態からの解放
Jimmy➡ "prison" からの解放
お金➡ "safe" からの解放
少女➡ "a new safe" からの解放

（3）共通する属性

反復される語のなかから「金庫」と「銀行」に着目すると、それぞれ中にお金を閉じ込めるという共通の属性が認められる。特に "bank" の多義性からその属性を見ると「銀行」としてはお金をプールしておく場であり「堤防」としては水の自由な流れを妨げるというもので、どちらも閉鎖的である。また、お金自体にも水のイメージがあり、流通貨幣 (currency) という語があるとおり、お金は絶えず流れているのが本質で、そうでなければ経済は成り立たない。ここに見られる属性は閉鎖であることが確認できたが、Jimmy 自体「監獄」(prison) に閉じ込められていた。さらに反復される語の「破る」「開く」や反復される行為の３例を合わせて考えると、テクストが示す方向性は閉鎖からの解放と流動となる。

（4）Jimmyの主体的動き

次にJimmyの主体的動きをピックアップしてみる。まず金庫を破る (break into)。Elmoreに移動する (move to)。靴屋を開く (open)。そして銀行の金庫の扉を開く (the door was open)。ここに認められるのは「開く」と「流れる」というJimmyの属性だ。善悪の判断抜きにその特徴を見ればJimmyは開く人であり、警察に追われているとわかれば別の町に移動する流れ者なのである。

（5）関連付け

ここまで着目してきたことを関連付けて最終的な解釈を行う。流れ者Jimmyと流通すべきお金が最終場面で同時に銀行の中にあり、そこにはMr Adamsご自慢の金庫があるという設定だ。ここは閉鎖の属性を持つ銀行の中に、さらに閉鎖の属性を持つ金庫があるという入れ子的な二重構造となっており、閉鎖性が特に強調されている。「開く」と「流れる」の属性を持つJimmyは自分自身を解放できるのかが、最大のクライマックスとなる。反復される語の "the door" と "the thick door" はいずれも少女が閉じ

込められた扉だったが、それをJimmyは開いてきた。だが、銀行の正面扉 (the front door) をJimmyは開けるのだろうか。扉はふたつの世界を隔てる象徴であり、開くものでもあれば、また閉じるものでもある。扉を前にしたJimmyは次のように描かれる。「戸口のところでBen PriceがJimmyの行く手に立ちはだかった。」(At the door Ben Price stood in Jimmy's way.) しかしテクストはBenだけを銀行から去らせ、Jimmyのほうは銀行に取り残したまま終結する。

この状況が暗示するものは何だろうか。解放が許されなかったJimmyに残されたのはSusanとの結婚であり、Adams家の一員になることだ。そこにはJimmyとは反対の属性を持つMr Adamsがいる。Mr Adamsは "banker" であり、お金にしろ水にしろ流れるものの自由な動きを妨げる。また、「私でさえこの扉は開けられない」(Even I can't open the door.) との発言にもJimmyとの違いが認められる。開く属性のJimmyとは対照的にMr Adamsは扉を開けられない人であり、犯罪者であるJimmyに対してMr Adamsは銀行家という町の権威者で「私でさえ」の発言には高慢さが見て取れる。そもそも金庫破り対金庫の番人といった違いがあるのだ。このような状況でのSusanとの結婚は、Jimmyが囚われの身となることを示唆し、冒頭にある監獄 (prison) への形を変えた逆戻りを暗示する。束縛や監視といった共通の属性から結婚は監獄のメタファーともなるのだ。それでは何からの解放をテクストは含意するのか。それは、結婚、家族、階級といった制度からの解放であり、読み方（1）を用いればキリスト教的規範という制度のなかで生きなくてはならないことことからの解放となるだろう。しかし、テクスト内で最後の扉は開かれることはない。Jimmyが目の前にする扉の向こうにあるものは、制度から解放された「自由」なのだ。

４．おわりに

ここではふたつの解釈を行ったが、中学、高校生に論旨の一貫した文学作品の解釈が求められているわけではない。教科書に載った文学教材を読む際に、気になった言葉、疑問に思った表現などをきっかけとして、言葉が互いにどのように繋がりあって働いているのかを考えることで、読みが深まってくる。それだけでなく、多様な読み方ができるのは何よりも楽しいことなのだと知ってほしい。答えはひとつではなく、発想と関連付け次第で自由な読み方ができるのだ。授業を行う教員にとっては、文学教材を扱うことで一語一義的な理解を超えて、訳読だけでは隠れてしまい見えてこなかったことの発見を伝える授業が期待できる。また、文学教材は多くのトピックを提供してくれる。人の成長や恋愛から社会における制度や流通経済に至るまで、中学校の教科書に掲載された文学教材だけでも多様なディスカッションのトピックが見つけられる。年々、文学教材の数は減り、正課からは外され巻末の付録的な存在へと追いやられてきているが、コミュニケーションのもととなる言葉に対する感受性を養うには、文学は最適な教材だと言えるだろう。

注

１．田口（2016）は原作と改作版、あるいは改作版同士の「比較読み」を取り入れた文学教材の活用法を提唱し、原作"A Retrieved Reformation"と中学および高校の教科書に掲載されたその改作版を比較して文学教材の意義を論じている。

２．改訂された2016年版『New Crown English Series 3』では"rose"に関する場面が削除されている。また、結末の場面もSusanとJimmyが結ばれることが明示的になる加筆が行われているので、文学作品としては解釈の余地の多いオープンエンディングとなっている2012年版を本稿では用いた。

３．イギリスの批評家であり小説家のLodgeは文学作品における"Repetition"（反復）の効果を*The Art of Fiction*で分かりやすく解説している。この書には本論でも扱った「象徴」や「名前」など文学作品を理解するうえで重要な50の項目が文学テクストの引用とともに紹介されており有益である。

引用文献

Lodge, David. (1992). *The Art of Fiction.* London: Penguin.［柴田元幸・斎藤兆史（訳）（1997）『小説の技巧』東京：白水社］

南出康世・他（2014）.『ジーニアス英和辞典』第５版，1815．東京：大修館.

中村愛人（2004）.「英語教育における文化教材としての文学作品の意義」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第２部第52号，115-119.

根岸雅史・他（2016）.『New Crown English Series 3』改訂版，114-117．東京：三省堂.

小澤浩美・幡山秀明（2010）.「英語教育と文学的教材［11］－学習指導要領と文学的教材」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』第33号，315-320.

Poe, E. A. (1986). *The Fall of the House of Usher and Other Writings*, 89-90. London: Penguin.

斎藤兆史・海木幸登・室井実稚子・中村哲子（2004）.「文学こそ最良の教材：英語の授業にどう活かすか」『英語教育』10月増刊号，６-14．東京：大修館.

高橋貞夫・他（2012）.『New Crown English Series 3』，105-107．東京：三省堂.

田口誠一（2017）.「中学校英語教科書のリーディング教材研究」『尚絅大学研究紀要人文・社会科学編』第49号，１-14.

田口誠一（2016）.「英語教育における文学教材－O. Henryの “A Retrieved Reformation” とそのリトールド版を中心に」『尚絅大学研究紀要人文・社会科学編』第48号，71-84.

ウィキペディア（2018）.「ヴァレンタインデー」https://ja.wikipedia.org/wiki/バレンタインデー